

現状模写というもののありべき姿、あり方の追求と実証

— 東京藝術大学大学美術館蔵「阿弥陀三尊来迎図」の現状模写を通して —

金 慧印（東京藝術大学大学院）

【原本について】

原本：絹本着色「阿弥陀三尊来迎図」一幅 東京藝術大学大学美術館蔵 鎌倉時代後期

縦 119.5cm 横 50.5cm

本研究の対象作品である「阿弥陀三尊来迎図」は、阿弥陀如来と観音菩薩、勢至菩薩が紫雲に乗り人間世界へ来迎する場面が描かれている。これは、三尊形式で描かれた来迎図の一例であり、三尊の肉身から着衣にかけて金の輝きで覆う悉皆金色の技法が用いられている。同形式の来迎図の中では欠損が少なく、特に三尊の衣に施された截金の完成度が高い、大変優れた作品である。

原本は平成4年から平成6年にかけて修理が行われ、現在の状態に至っている。

【研究目的】

現状模写とは、現在の図様を表面的に写す作業だけでなく、様々な調査から得られたデータに基づき、原本が描かれた時代の材料や様式、技法を学ぶことである。筆者は、作品に向かった作者の行為にも注目すべきであり、それが古画に残された謎を解くきっかけになると考える。

原本の修理時に撮影された写真から、三尊の衣の輪郭線にのみ截金の下描き線が確認できた。本研究では、衣に施された截金文様の下描き線を絹へ描かずに截金を施した。衣の輪郭線にのみ墨線を引いた状態で截金を施すことで、原本の制作工程により近い截金技法が身につき、現状模写を行う本来の意味に叶うと考える。



原本（裏面）／修理時、肌裏紙を除去した状態 ▶

【原本の現状と考察】

本尊の光背から出る筋光明には細さ 0.65mm ～ 1.20mm の截金が施されている。背景全面に群青が塗られ、画面の上端から本尊の光背にかけての部分が著しく剥落している。さらに、画面左側の背景にも円形の剥落が見られた。その一方、下端部の背景の彩色は、上端部より折れ目や剥落が少なく比較的安定していた。三尊の肉身は金泥で厚く塗られ、その上に幅 0.3mm ～ 1.1mm の截金が施されていた。三尊の衣には 11 種類の截金文様が使われている。顔や手足の線は朱を混ぜた墨で細く描かれ、目の中は鉛白や朱墨、群青で彩色され立体的に表現されていた。三尊の足元には蓮弁や雲が描かれていたが、蓮弁に施された截金はほとんど残っておらず、彩色の剥落も著しい。光背に用いられた鮮やかな群青と同じ色料と見られる群青で彩色された雲は、紫雲より剥落した範囲が

広い。画面の右下にある建物の内部には、8人の人物が数珠を持ち合掌している姿が描かれている。また、厚く塗られた絵具が剥落した跡からは下描き線が観察でき、絵具の上から描かれた細い線とは対照的な太くて力強い線が見られた。

【制作について】

・上げ写し

原本には截金の細かい描写が多用されていたため、上げ写し作業をするにあたり鮮明な写真が必要であった。そのため、原本を12枚で分割撮影して1枚に合成することで高解像度の画像を作成した後、原本の大きさに合わせて印刷した。

滲み止めの礬水を塗った薄美濃紙を写真の上に置き、紙に巻いた棒を転がしながら、残像を利用して墨で上げ写しを行った。



上げ写し

・絹上げ

修理時の資料から、原本には輪郭線が衣にのみ引かれていることが分かった。そのため、主な線だけ下描き線を墨で描き写し、截金の細かい文様は絹に写さなかった。



絹上げ

・彩色

肉身部分を彩色する際は、金泥を塗布する前に表側へ鉛白を塗り、その上から丹の具を厚く塗り重ねた。修理時の写真からは裏彩色をほとんど確認できなかったため、表から厚塗りをしたことで背景に塗られた群青との厚みを合わせる効果を得られたのではないかと考えた。

経年変化した色を表現するには先行研究の資料を参考にして彩色を行った。制作当時で使用されたと思われる絵具を塗布した後、焼いて濃く変色させた天然岩絵具を重ねることで、原本の現状の色調に近付けた。

・截金

截金に使用した箔は、長い歳月を経た風合いを出すため、線香の煙で燻して古色をつけてから使用した。緑付き4号箔を4枚に焼き合わせて線香の煙で燻し、古色をつけた。原本と同じ細さに竹刀で裁断し、布海苔を混ぜた膠を用いて接着した。

卍繋ぎ文や雷文様は、一本の糸状の箔を折りながら施されていることが熟覧調査の際に確認できたので、原本と同じ手順で截金を施した。その際、燻蒸により金箔の表面と裏面で色味が異なるため、折り曲げて文様を施した後、線香の灰で色を合わせた。唐草文様も同様に、花びらの先を折り曲げながら箔を断ち切らずに截金を施した。



・臨写

大学所蔵の作品であることから二週間臨写する機会を得られた。ケースに入れた原本を横に置いて制作中の模写と比較しながら、写真では読み取りにくい絵具層の厚みや経年変化した色調を確認しながら仕上げることができた。



【まとめ】

現状模写を行ったことで作品が描かれた当時の様式や材料の扱い方、作者の個性等を学べる貴重な体験ができた。まず、截金文様の下描き線を描かずに截金を施したことで、金泥が塗られた三尊の肉身部分の発色をよりよく仕上げることができ、原本により近い模写作品が制作できたと考える。さらに、天然岩絵具の扱い方と共に彩色方法に関してより理解を深めることができた。以上のように現状模写を行うことで画材や表現技法を明確にしたと同時に、現状模写を行う必要性があることに気付くことができた。

今後は、現状模写の本来あるべき姿、あり方の追求と実証に関して工夫する研究者が増えることを期待する。また、韓国における現状模写の必要性を検証する取り組みに貢献できると考える。



東京藝術大学大学美術館蔵「阿弥陀三尊来迎図」 現状模写

参考文献

有賀祥隆『日本の美術 373 截金と彩色』至文堂 1997 年

中村祐子「悉皆金色を中心とする彩色技法に関する研究」2010 年

東京藝術大学大学美術館蔵「阿弥陀三尊来迎図」修理報告書 1994 年

「東京藝術大学所蔵品図録」1981 年(2003 年改編)